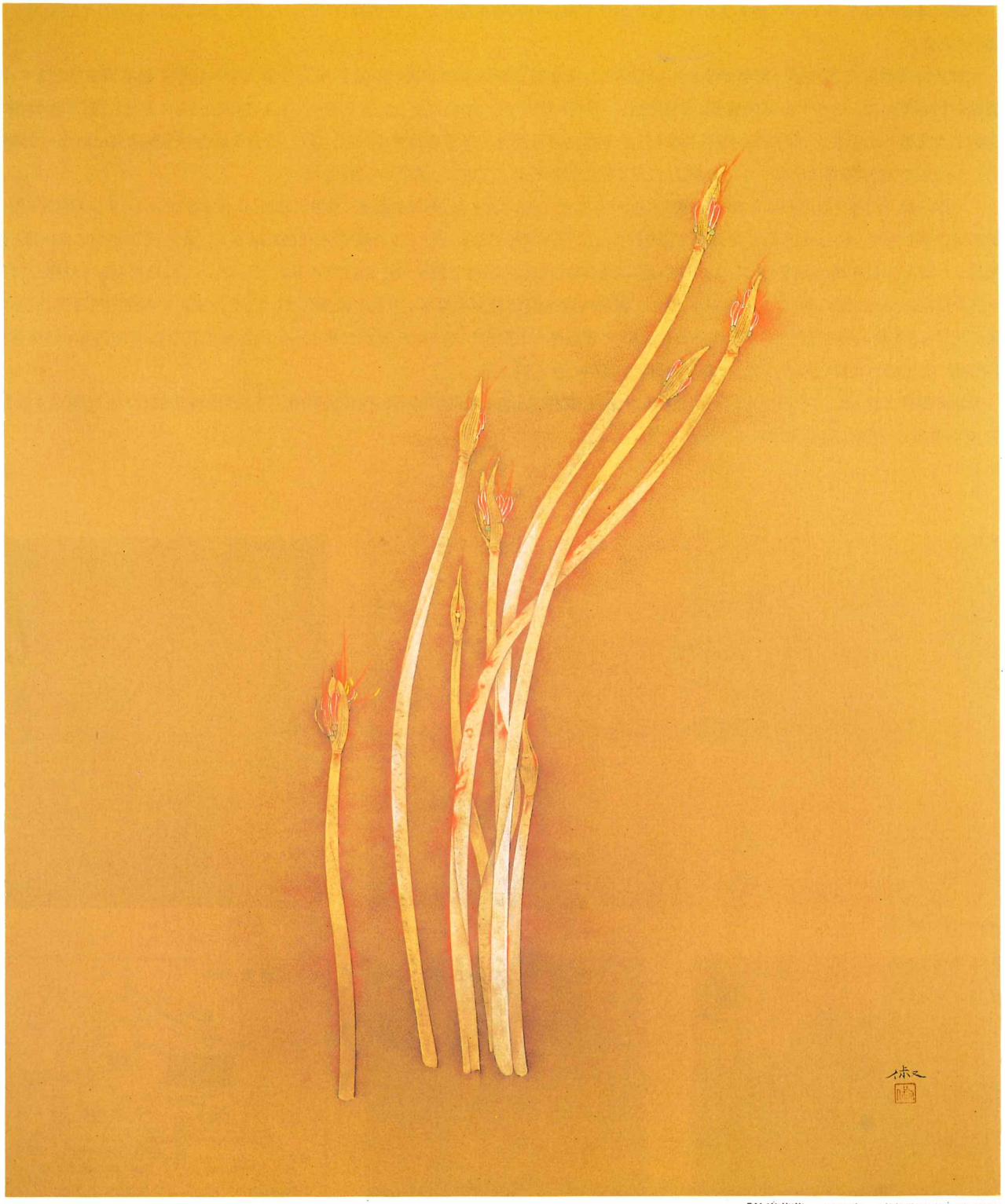


「彼岸花蕾」 1980年　京都市立芸術大学蔵

HIDETAKA OHNO

大野俶嵩展

——「物質」から華へ——

1989年9月23日[土]→10月25日[水]

開館時間＝午前10時→午後6時30分[但し入館は6時まで] 木曜日休館

《会期中一部展示替があります。》

主催・会場＝(財)品川文化振興事業団 ○美術館

入館料＝一般500(400)円/高・大生300(200)円/小・中生100(50)円

( )内は20名以上の団体料金および割引入館料

対談

大野俶嵩・木村重信(大阪大学名誉教授)

9月24日[日]午後2時より

会場＝大崎ニューシティ内別会場

(財)品川文化振興事業団

○美術館

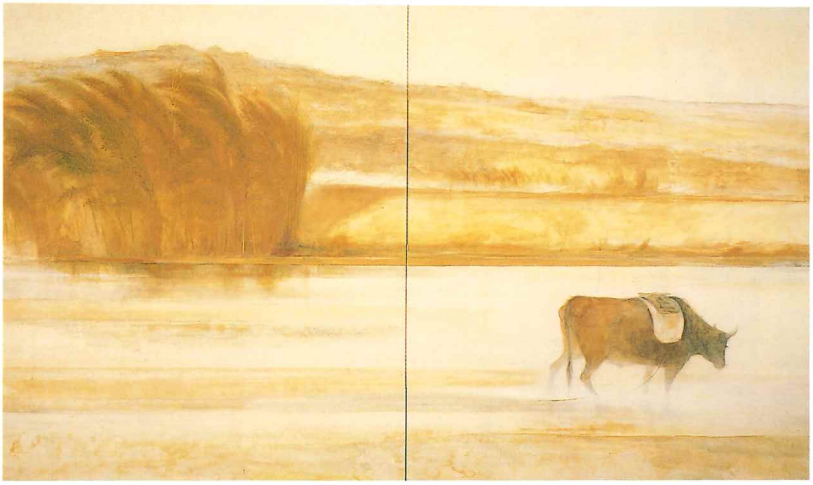
東京都品川区大崎1-6-2大崎ニューシティー2号館TEL.495-4040

戦後日本画の革新者であり、絶えざる自己超克の下で厳しい振幅を見せた大野俶嵩(ひでたか)氏の、初めての本格的な回顧展を開催いたします。

大野氏は、1922(大正11)年、京都で生まれ、1941年に、京都市立絵画専門学校(現・京都市立芸術大学)に入学、日本画を学びます。敗戦後の1949年には、パンリアル美術協会の第1回展に、当時の若手日本画家であった三上誠・下村良之介らとともに参加し、日本画画壇の因習的な体質への抵抗と、日本画の膠彩芸術としての表現の可能性の拡張をめざしました。また、同会を退会後も国内外にわたって個展を行うとともに、各国際展に出品するなど、既存の日本画の範疇を超えて幅広く活躍してきました。

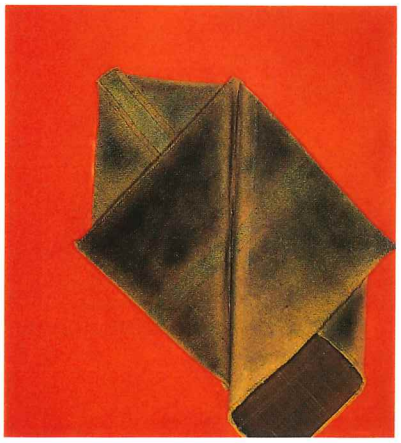
その作品は、パンリアル時代から多様な様式の試みを見せ、1958年からは、麻袋を画面に張り付けた、いわゆる「ドンゴロス」の連作を始めます。また平行して、セメントをボンドで捏ねて張り付けたり、墨と胡粉によるモノトーンの清澄な作品も試みています。そのかつてないほどの徹底した既存の日本画の概念・メディアの問い返しの試みは、むしろ海外で認められるものとなりました。そして、1971年頃からは再び対象を外界に求め、とくに花にモチーフを集中し、極めて精緻な南宋院体画風の画面へと大きく転回しました。その後10年の歳月を経て、花は次第に花ならざる華の小宇宙を通して、生命の、霊気の、結晶体へと変幻しています。それは単なる伝統回帰ではなく、本源的なものが有機的形象へと結ばれてゆくという点で、一貫した希求の姿勢と言えましょう。

今回の展観では、激しく多様な変容を見せる氏の、初公開作品も含めた初期からの代表作70数点を、素描等20数点と併せ展示することで、その軌跡の全貌に迫ろうとする初の試みです。

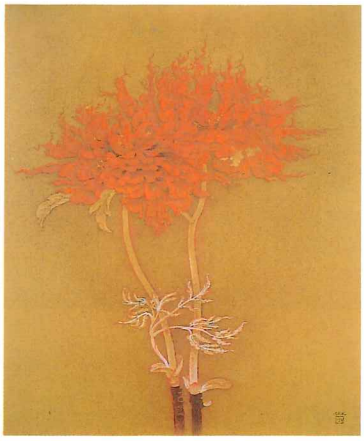


「城南の春」 1947年

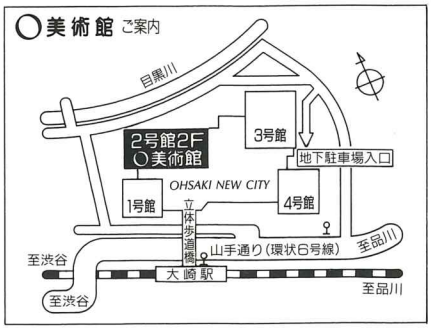
「緑錆」 1961年



「緋」 1963年 京都市美術館蔵



「羯羅倶熾」 1982年



◉交通
山手線大崎駅(東口)下車徒歩1分
東急バス(大井町駅↔渋谷駅)大崎駅下車徒歩1分

◉駐車場
美術館専用駐車場はございません。
お車でご来館の場合、「大崎ニューシティ」地下2Fの駐車場(有料)をご利用下さい。

(財)品川文化振興事業団
美術館

オー美術館 JR山手線大崎駅東口下車徒歩1分
東京都品川区大崎1-6-2大崎ニューシティー2号館 TEL.495-4040